

平成 2 7 年 6 月 2 3 日現在

機関番号：3 4 4 2 6

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012 ~ 2014

課題番号：2 4 6 5 2 0 4 3

研究課題名 (和文) 演奏様式に基づく東南アジア音楽文化圏の再画定

研究課題名 (英文) Redemarcation of Southeast Asian Music-culture Zone Based on A Particular Music Playing Style

研究代表者

由比 邦子 (YUHI, Kuniko)

桃山学院大学・国際教養学部・非常勤講師

研究者番号：5 0 5 2 8 5 8 6

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 2,300,000 円

研究成果の概要 (和文) : 本研究は、従来のゴング・チャイムという楽器ではなく、インターロッキング様式という楽器演奏法 (個別音分担奏) に着目して東南アジア音楽文化圏を再画定しようという試みである。

3 年間の現地調査の結果、この新しい音楽文化圏の北限である台湾から、南限のインドネシアに至るまで、その中間に位置するブルネイも含めて、東南アジアにおけるオーストロネシア語族の分布域にインターロッキング奏法が見られることが明らかになった。すなわち、本研究の目的である東南アジア音楽文化圏の再画定が可能となったのである。さらに、音高を伴うポリリズムを原初形態とするインターロッキング奏法の成立過程の一端を解明することもできた。

研究成果の概要 (英文) : This study aims at the redemarcation of Southeast Asian music-culture zone paying attention to the existence of the interlocking music playing style. The interlocking playing style means the way to produce melody by sounding alternately the several musical instruments of the same type which individually tuned to a particular pitch.

Through three years of field researches, it became evident that several cases of the interlocking playing style were actually found from the northern-most Taiwan through Brunei to southern-most Indonesia. This region overlaps the domain of the Austronesians in Southeast Asia. A new boundary, thus, turned out to be drawn in Southeast Asian music-culture zone with regards to the interlocking playing style widely owned by the Austronesians living in this zone.

The further observation, in addition, tells that the interlocking playing style might have originated from a kind of polyrhythm with each component rhythm owing an individual pitch.

研究分野：音楽学

キーワード：インターロッキング奏法 東南アジア音楽文化圏 オーストロネシア語族 ポリリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する発端となったのは、インドネシアのボロブドゥール寺院の壁面浮彫に複数人で演奏される複数の小型シンバルの演奏図をみつけたことである。そして、この演奏図の意味を考えるヒントになったのが、ゴング・チャイム gong-chime という楽器である。

従来、東南アジア音楽文化圏はこのゴング・チャイムの存在によって規定されと考えられてきた。ゴング・チャイムとは、音律を定めたケトル型のこぶ付きゴングを複数個、杵の上に並べて置き、旋律を演奏する楽器である。このタイプの楽器は、木琴やメタロフォンのような音板旋律打楽器とともに、東南アジアの大規模器楽アンサンブルの中心をなす重要な楽器である。

ゴング・チャイムの演奏は通常一人で行なわれるが、一人の人間が一つのゴングを個別に担当し、旋律の流れの中で自分の担当する音を鳴らすという奏法も時には見られる。このような奏法はインターロッキング様式 interlocking playing style と呼ばれる(研究代表者は「個別音分担奏」と解釈する)が、この奏法はゴング・チャイムという楽器の成り立ちを示唆する。すなわち、元々は音律の異なる個別のゴングを分担して演奏していたものが、一つの杵に乗せて一人で演奏するようになったと考えられるのである。

ところが、このインターロッキング様式はゴングの演奏だけに見られるものではない。複数人で竹筒や木の棒(杵)を用いて一本の旋律を作り上げていくという演奏様式が、台湾からインドネシアに至るまで、東南アジアのオーストロネシア語族分布域に見られる。最初に述べたボロブドゥール寺院の小型シンバル演奏図もインターロッキング様式によると解釈すると、歴史的に過去から現代に至るまでインターロッキング様式の演奏法が東南アジアのオーストロネシア語族の間で継承されてきたということがわかる。これが本研究を始めようとした当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、東南アジア音楽文化圏がゴング・チャイムという楽器の存在により特徴づけられるという従来の考え方を生かしながらも、インターロッキング様式という楽器の演奏法に注目して音楽文化圏の定義を行なうという新しい着想による。

また、オーストロネシア語族の居住域とインターロッキング様式の演奏法の分布域を重ね合わせるという斬新な視点に基づいて、過去から現在に至るまである一つの楽器演奏法が東南アジアのオーストロネシア語族の間で受け継がれてきたことに着目して、新たな東南アジア音楽文化圏を再画定することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究はあらかじめ参照できる資料がほとんどないため、主として現地調査の手段をとった。調査地には、当該音楽文化圏の北限である台湾、中間に位置するブルネイ・ダルサラーム(以下、ブルネイと呼ぶ)そして南限のインドネシアの3地域を選んだ。以下に、各年度の調査について概要を記す。

(1) 平成24年度の調査

平成24年度は、台湾原住民族の一族であるサオ族の杵搗き音楽を調査した。サオ族は日月潭周辺に居住し、比較的少人数の民族である。サオ族の杵搗き音楽は、旧暦8月のサオ族祖霊祭(新年祭)前夜に行なわれる杵音が本来の演奏機会であるが、情報不足のため、杵音儀式に参加することができなかった。年一回しか行なわれない杵音儀式は観光客対象のパフォーマンスとして月に数度行なわれるということを知り、その舞台上演を見ることによって杵音の演奏の概要を知ることができた。

(2) 平成25年度の調査

平成25年度は、台湾サオ族の杵搗き音楽の調査を続行するとともに、ブルネイのゴング・チャイム音楽についての調査を行なった。

台湾サオ族の杵搗き音楽については、祖霊祭前夜の杵音儀式に実際に参加し、杵搗きを実際に体験することもできた。

ブルネイでは、国立ブルネイ・ダルサラーム大学教員と文化・若者・スポーツ省の協力により、ブルネイ族とクダヤン族のグリントアン gulantangan という器楽アンサンブルの調査を行なった。

(3) 平成26年度の調査

平成26年度は、インドネシアの調査に集中した。インドネシアには代表的な民族楽器アンクルン angklung がある。この楽器はインターロッキング様式で演奏され、本研究の着想の発端となった楽器の一つである。アンクルンがとくに盛んに行なわれている西部ジャワにおいて調査を行なった。バンドゥンにあるスリ・バドゥガ博物館およびインドネシア文化芸術大学バンドゥン校が主たる情報源である。

4. 研究成果

まず、各地における現地調査により判明したことを記す。

(1) 台湾サオ族の杵搗き音楽

旧暦8月のサオ族祖霊祭の開始前夜(大晦日)に行なわれる杵音は、サオ族の女性たちによって演奏される。女性たちは儀式のための家屋に集まり、音律の異なる7~8本の杵をそれぞれ1本持ち、床に埋められた平らな石に叩きつけて演奏する。

長2度の音程関係に調律された低音部の2本の杵で打ち出す旋律に、高音部の数本の杵による旋律が重ねられ、その単調な旋律を延々と繰り返すのである。典型的なインターロッキング様式による演奏であると言える。さらに2～3本の竹筒を地面に打ちつけて、杵のアンサンブルをより賑やかなものにする。

年一回のこの杵音儀式を観光客対象にパフォーマンス化したものが、月に数度、日月潭の湖畔にある観光ステージで上演される杵歌である。杵搗きによる旋律奏は杵音儀式で行なわれるものと同じであるが、演奏の途中に歌唱が挿入される。淡々とした演奏で、杵音儀式のような熱気は一切感じられない。

(2) ブルネイのグリントアンガン

ブルネイにはグリントアンガン *gulintangan* というゴング・チャイムを中心としたゴング・アンサンブルがある。

ブルネイ人のグリントアンガンはアンサンブルの中心となるゴング・チャイムと4種類のこぶ付きゴング、太鼓、縦笛から成る。ゴング・チャイムも各ゴングも一人ずつが担当し、ゴング・チャイムが旋律を、そしてゴング類がインターロッキング奏法を行なう。ただし、ゴング類によるインターロッキング奏法は、旋律を組み立てるというよりも、音高の異なるゴングを交互に鳴らすという演奏法である。この演奏法は音高を伴うポリリズムと呼んだ方がよいのかもしれない。

一方、クダヤン人のグリントアンガンは、ゴング・チャイムもゴング類もすべて音板打楽器(木琴の類)で演奏される。楽器名称はブルネイ人の金属製グリントアンガンと同じであるので、明らかに金属製楽器を木製楽器に置き換えたものと解釈される。

この金属製楽器と木製楽器の互換性については、ブルネイ人とクダヤン人とで説明の仕方が異なるのが興味深い。クダヤン人は森林資源豊かな森の民であるため、木製グリントアンガンを使うと主張するのに対して、ブルネイ人はクダヤン人の経済事情に言及するのである。明らかに金属製楽器の優位性がうかがえる。ここに主要民族であるブルネイ人と少数民族のクダヤン人を巡る文化の中心と周縁の理論が垣間見える。

(3) インドネシアのアンクルン

インドネシアのアンクルン *angklung* は、オクターヴ関係の2本の竹筒を杵にはめた楽器で、一つの楽器が特定の音高を持ち、現在では西洋の平均律に調律したセットが学校教育やポピュラー音楽の世界で広く用いられている。インターロッキング様式で演奏される代表的な楽器である。

しかし、西部ジャワのバンドゥンにあるス

リ・バドゥガ博物館およびインドネシア文化芸術大学バンドゥン校のアンクルン科における調査の結果、意外なことがわかった。西洋平均律に調律した現代のアンクルンに対して、アンクルン・ブフン *angklung buhun* と呼ばれる古式のアンクルンは稲の神に関わる儀式の脈絡で用いられ、旋律を組み立てるというよりも音高を伴うポリリズムの様相を呈していたのである。すなわち、ポリリズムによる演奏を行なっているうちに、各楽器が音高を伴うようになり、結果的に旋律を生み出すようになったのである。ブルネイのグリントアンガンにおけるゴング類にも共通する現象である。

以上、3地域における現地調査の結果、台湾、ブルネイ、インドネシアに、使用楽器は異なれどもインターロッキング様式の演奏法が存在することがわかった。したがって、台湾を北限とし、インドネシアを南限とする東南アジアのオーストロネシア語族分布域で、インターロッキング奏法を指標として東南アジア音楽文化圏を再画定できることが証明できた。従来のゴング・チャイムという楽器による東南アジア音楽文化圏とは異なり、通常東南アジアの一部とは考えられない台湾を、オーストロネシア語族系の原住民族に着目することによって、この新たな東南アジア音楽文化圏に含めることができたのは、東南アジア研究において画期的なことであると思料する。

さらに、古式アンクルンの様態より、旋律を組み立てることを目指すインターロッキング奏法の原初の形態が、旋律志向というよりも音高を伴うポリリズムであった可能性が浮上したことも、本研究の大きな成果であると言える。

今後、上記3地域以外にも調査の幅を広げていけば、東南アジアのオーストロネシア語族分布域にインターロッキング様式の演奏法を指標とした東南アジア音楽文化圏の画定がより確固たるものになる確信がある。それと同時に、インターロッキング奏法の成立過程をさらにくわしく解明できる可能性も十分感じられるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 由比邦子、台湾サオ族の杵搗き音楽に見る伝統の保持と生き残るための観光化、民族藝術 Vol.31、査読有、2015年、pp.93-99

(2) 由比邦子、古代ジャワの奏楽図浮彫が暗示するインターロッキング文化圏 インド化の隠れ蓑を被った東南アジア基層文化の自己顕示 、国際文化論集 Vol.49、査読無、2014 年、pp.191-207

〔学会発表〕(計3件)

(1) 由比邦子、台湾邵族の杵音と杵音舞に見る伝統の保持と生き残るための創作、民族芸術学会第30回大会、2014年9月21日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)

(2) 由比邦子、古代ジャワ奏楽図浮彫が示唆するインターロッキング文化圏、東洋音楽学会第64回大会、2013年11月10日、静岡文化芸術大学(静岡県浜松市)

(3) YUHI Kuniko, Foreign but Indigenous “Southeast Asian” Performance Depicted on the “Indianized” Borobudur Reliefs, The 22nd Conference of International Association of Historians of Asia, 4th July 2012, Surakarta (Indonesia)

6. 研究組織

(1)研究代表者

由比 邦子 (YUHI, Kuniko)

桃山学院大学・国際教養学部・非常勤講師

研究者番号：50528586